

## 2 安定生産・品質向上に向けた改善策～昨年の反省から

### 【1】平成27年産の主な障害の発生要因

27年は青米や白未熟（腹白・心白）の混入、胴割れが散見されました。いずれも初期生育不良～登熟ムラに起因する部分が多く、気象の影響が大きいとは言え発生程度は地域・個人差が大きいことから、管理により軽減・回避が可能だったとも言えます。

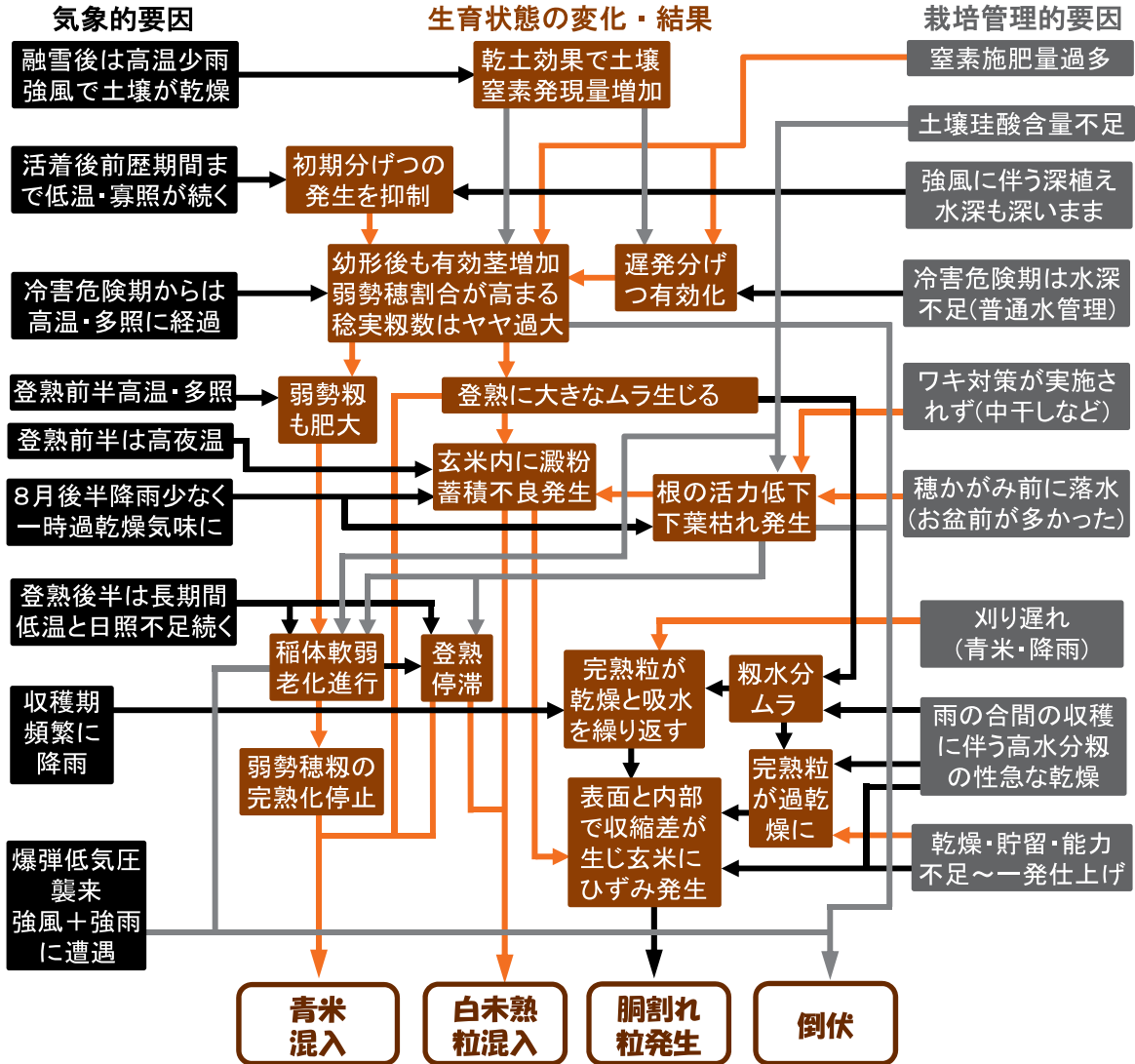


図7 平成27年の主な障害の発生要因の相関図

### 【2】茎数の早期確保が品質向上の第1歩

早期茎数確保で穂揃いを高めることが重要です。

昨年は土壌が良く乾燥したにもかかわらず、強風のため植付深が深く、活着後も水深が深いままで初期生育が停滞した水田が数多く見られました。

適正移植深と適正水深を心掛けましょう。

☆ 移植時期: 適期内(5/18～5/31) 出来るだけ早く。

☆ 移植深: 1.5～2.0cm。1葉目が地表に出ている。

☆ 水管理: 日照時→浅水(水深2～3cm)・低温強風時→深水(草丈の3/4)。 毎日調整を。

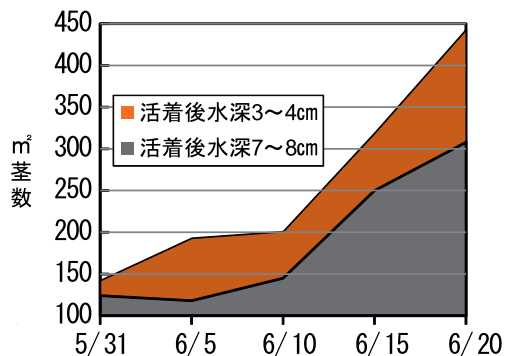


図8 水深による茎数確保の差(A町の事例)

### [3] 地力に応じた施肥窒素量を心がける

#### ～土壤乾燥程度も考慮 10俵狙いはリスク大

ここ数年、窒素施肥量が多くても好天に支えられ大きな支障もなく多収となったため無意識に多肥傾向となっていないでしょうか？ 管理を徹底したとしても多肥栽培では天候不良に太刀打ちできません。施肥量が適正か今一度、見直しが必要です。

表1 窒素施肥量の目安(kg/10a) H24発行施肥ガイドブックより作表(条件により±0.5kgの範囲で調整可)

目標収量	510kg/10a		540kg/10a	600kg/10a	510kg/10a	540kg/10a
目標蛋白	低蛋白(6.8%以下)		6.9~7.9%	8.0%以上	—	—
適用品種	ななつぼし ゆめぴりか	きらら397	きらら397	きらら397	はくちょうもち きたゆきもち	風の子もち
褐色低地土	8.0	8.5	9.5		9.0	9.5
灰色低地土	7.5	8.0	9.0	9.5	8.5	9.0
灰色台地土	7.5	8.0	9.0			9.0
グライ土			8.5	9.0	8.0	8.5
泥炭土			7.5	8.0	7.0	7.5

※施肥量を見直し減肥する場合、大幅な減肥は減収となる恐れもあるので前年の-0.5~-1.0kgの範囲にとどめる。

また、ほ場の乾燥が進むと土壤から窒素発現量が増え(乾土効果)、窒素を増肥したのと同様の効果が生まれます。土壤の乾燥程度に応じて、減肥することも大切です。

表2 乾土効果の発現量に対応した窒素減肥量(kg/10a)

水熱係数	乾湿程度	地力(培養窒素mg/100g)		
		低(<10)	中(10<)	高(14<)
2未満	著しく乾燥	0.5	1.0	1.5
2~3	乾燥	0.5	0.5	1.0
3~4	やや乾燥	—	0.5	0.5
4以上	平年並~湿	—	—	—

表3 H27年の土壤乾湿程度

アメダス 観測地点	乾湿程度	水熱係数	
		27年	平年
士別	やや乾燥	3.2	5.8
和寒	やや乾燥	3.4	5.6
朝日	やや乾燥	3.9	6.3

※水熱係数:10×積算降水量÷日平均気温10℃以上の積算気温(対象期間は前年9/1~10/30と当年4/11~5/10)

なお、基盤整備後1年目の窒素施肥量は、当面、復元田初年目に準じて下さい。

☆施肥例 側条用444×25~35kg/10a のみ(窒素3.5kg~4.9kg 地力に応じ調整する)

### [4] 根と稲体を最後まで健全に保持する

健全な稲体が保持できない(ワキによる根傷みや高温時の水分不足は影響大)と登熟に支障をきたし品質低下にもつながります。生育状況に応じた管理を実施しましょう。

- ワキが激しい場合は、幼穂形成期前に中干しを行う。[田面に軽くヒビが入る程度]
- 幼形期~冷害危険期は深水を徹底する。[不稔防止・遅発分けつの抑制]
- 出穂前に中干し実施。[走り水や落水、ほ場乾燥がスムーズになるよう溝切りも併せて施工]
- 出穂が始まったらすぐ入水[ヒタヒタ程度で十分。その後は間断灌漑で土壤水分を維持]
- 出穂後25日頃(穂かがみ期)を目安に完全落水。[早すぎる落水は未熟粒(青米・腹白)の元]
- 落水後は大きなひび割れ(1cm以上)が入る前に走り水を。[通水終了前にも1度走り水]

### [5] じっくり乾燥し胴割れを防ぐ

急激乾燥や過乾燥が胴割れの最大の原因です。また登熟ムラが大きく、収穫前後に頻りに降雨があると、完熟粒は乾燥と吸水を繰り返す、中心と外側の水分差でひずみが生じ胴割れの発生を助長します。登熟ムラの大い年ほど慎重な乾燥が必要です。

- 送風温度は40~45℃ 濡れた籾:最初は火を入れずに3~5時間位常温通風で乾かし、その後通常の送風温度より5℃程度下げて乾燥。
- 毎時乾減率0.8%以下 高水分籾:水分ムラが大きいため通常送風温度より5℃程度下げて乾燥。
- 水分はこまめに確認! 胴割れが懸念される場合は0.5%程度に。自動では「ゆっくり」等を選択
- 2段乾燥を導入する 乾燥機の水分計を過信しない。乾燥後の水分の戻りも考慮し乾燥を進めるが、こまめに整粒が過乾燥となっていないか単体の水分計で確認。
- 水分ムラや胴割れ解消に効果的。水分18%で一時貯留し1~2日後に仕上げ乾燥。籾倉が小さい場合はフレコンや・ハードコンテナを利用。